

## 「日蓮大聖人苦難の生涯」

### < 語句解説 >

#### 御書

「御書」とは、日蓮大聖人が執筆あるいは口述された書の尊称。大聖人門下が、心肝に染め、教義の根本とすべき聖典である。

御書は大きく分けると、法門について述べた論文（「観心本尊抄」や「開目抄」など）と、弟子・檀那への手紙（消息文）、要文抄録（経文や摩訶止観などの要文を書き写されたもの）、系図（「一代五時図」など）などに分けることができる。また、格調高い漢文体のものと、平易な仮名交じりのものがある。

大聖人は、民衆のために、わかりやすい仮名交じり文で教え説き、さまざまな比喻や故事を織り交ぜながら法門の内容を示している。

そして、数百編ある御書の中から、特に重要なものを十篇（十大部）選ばれた。御述作順に挙げれば、①唱法華題目抄、②立正安国論、③開目抄、④観心本尊抄、⑤法華取要抄、⑥撰時抄、⑦報恩抄、⑧四信五品抄、⑨下山御消息、⑩本尊問答抄である。

#### 清澄寺

千葉県鴨川市の清澄山にある寺で、山号は千光山。当時は天台宗であったが、のちに真言宗になり昭和24年（1949年）には日蓮宗に改宗し現在にいたる。

#### 虚空蔵菩薩

智慧、福德、慈悲が虚空（無限の空間）の様に尽きることがないことから名付けられた菩薩。

#### 立教開宗

清澄寺持仏堂で、日蓮大聖人が南無妙法蓮華経と唱え自らの法門を説き始めたこと。「法華経」を中心とする青年期の修学によって、末法における正法を覚知した大聖人は、ここに布教を開始するとともに独自の法門の完成を目指して、「法華経」身読の闘争を繰り広げてい

った。

#### 松葉ヶ谷

現在の神奈川県鎌倉市大町にあったと思われる地名で、立教開宗の後、日蓮大聖人はここに草庵を結んだ。

#### 岩本実相寺

駿河国蒲原荘岩本の比叡山横川系の寺院で、経蔵には一切経が納められていたという。日蓮大聖人は、この経蔵に籠って天変地異の起こる由来を經典に求めたと伝えられる。

#### 唱法華題目抄

内容は、有る人（念仏者）が予（大聖人）に問うという形式で、15の問答からなっている。主として法然以来の専修念仏・浄土信仰を破折するとともに、法華経が正法であることを示し、法華経の題目を唱える功德を述べられている。末尾に「法門をもて邪正をただすべし利根と通力とはよるべからず」と記されているように、法華経はじめ諸経の文に基づき、精密にして本質をとらえた議論が展開されている。

。

#### 立正安国論

当時、正嘉元年（1257年）の大地震をはじめ多くの天変地異があり、飢餓・疫病のため国中の民衆が苦しんでいた。その災難の根源を一切経に照らして勘案し、謗法、とりわけ法然の念仏宗が「一凶」であると断じ、解決法として、正法である法華経を社会の根本として打ち立てることを訴えている。

また、この誤りを続けるなら、当時まだ起こっていなかった自界叛逆難（内乱・同士討ちなどの難）と他国侵逼難（他国が攻め入ってくる難）が起こることを予言し、「汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰せよ、然れば則ち三界は皆仏国なり」と正法に帰依することを促している。

#### 宿屋禅門

（生没年不明）執権・北条時頼と時宗に、側近の「得宗被官」として仕えた家人。禅門とは入道と同義で、在俗のまま剃髪して仏門に入った男子をいう。

#### 松葉ヶ谷の法難

文応元年7月、幕府に提出した「立正安国論」では、当時の天変地異や飢饉・疫病の原因を、

人々が正法を捨て悪法に帰したことにあり、特に念仏は「一凶」であると断罪した。この結果、大聖人は幕府の上層部や念仏者たちの激しい怒りを買って、提出から1ヶ月後、念仏者たちが松葉ヶ谷の草庵を突然襲撃し、大聖人を力づくで亡き者にしようとした。

### 伊豆流罪

当時の執権は北条長時で、その父親・重時は念仏の強信者だった。長時は、父の意向を汲んで念仏僧らの讒言を用い、表向きは幕府法の「御成敗式目」によって、流罪を決定した。その罪状は「悪口の失」だったと考えられる。伊豆での大聖人は、法華経の行者の自覚を深めた。またこの間、船守弥三郎夫妻が帰依し、大聖人の生活を支えたと伝えられる。

### 小松原の法難

日蓮大聖人一行約10名は、東条の郷松原大路（千葉県鴨川市広場付近）に差しかかった。そこに地頭の東条景信はじめ数百人の念仏者が待ち構え、大聖人らを襲撃した。念仏の強信者だった景信は、立教開宗以来の大聖人の念仏破折等、積年の怨念を抱き、安房に帰国していた大聖人を亡き者にしようと企んでいた。この法難で、弟子一人が殉死、二人が重傷を負い、大聖人自身は頭に傷を被り、左手を打ち折られた。

### 平 頼綱

生没年代は？～1293年。北条家得宗被官で、北条時宗・貞時の二代の得宗に仕えた。平左衛門尉とも表記される。竜の口の法難の時、時宗の指示を受け、大聖人逮捕の指揮を執った。頼綱・次男助宗親子は大聖人一門を徹底迫害したが、後年、平禅門の乱（1293年）により誅殺された。

### 竜の口の法難

日蓮大聖人が蒙った「大事の難・四度」のうち、最大の難。平頼綱は12日夕刻、兵数百人を連れて松葉ヶ谷の草庵を急襲し大聖人を逮捕、佐渡流罪を言い渡した。しかし、大聖人を闇に葬ると決めていた幕府は12日の深夜、鎌倉・竜の口の刑場に連れ出し、斬首しようとした。その時、江ノ島方面から巨大な「光物」が現れ、おののいた武士たちは刑の執行を果たせなかった。この「光物」の正体は、「おひつじ・おうし座」流星群ではないか、という研究がある。東大天文台長であり、東大名誉教授でもあった、故・広瀬秀雄博士の説である。翌13日朝、時宗の使者が到着し、処刑を禁ずる命令が伝えられ、しばらく依智で沙汰待ちとなる。

## 依智

鎌倉時代の地名で、佐渡の守護代・本間重連の所領だった。現在の神奈川県厚木市依知。

## 佐渡流罪

律令時代より流罪には近流・中流・遠流の三段階があった。佐渡は最も重い遠流の地にあたり、流人たちは日蓮大聖人が「彼の国へ赴く者は死は多く生は稀なり」と記すほど苛酷な生活を強いられた。大聖人は竜の口の法難の後、佐渡に遠流され、文永8年(1271年)11月から文永11年3月下旬までの約2年5ヶ月間、艱難辛苦を忍ばれた。

## 塚原三昧堂

佐渡流罪中の大聖人が、文永8年(1271年)11月頃から翌年4月頃まで居住した三昧堂。「種種御振舞御書」の記述によれば、佐渡守護代・本間重連の邸の後ろに位置したが、死者を埋葬する山野の中であり、しかも廃屋同然で一間四面の狭さだった。

## 塚原問答

文永9年(1272年)1月16日、越後近辺、遠くは信濃から数百人ものに念佛者・真言師たちが塚原三昧堂に集結し、大聖人を論難しようと騒ぎ立てた。大聖人は、興奮する念佛者らを静め、道理・文証のうえから完膚なきまでに論破。これによって群衆の中には顔面蒼白で沈黙する者、さらに悪口する者、また改宗帰伏を誓う者も出たという。

## 開目抄

「開目抄」は、「法華経」の至高性に対する日蓮大聖人の絶対的な確信である。と同時に、末法の時代において、それを真に理解し説き広める資格のあるものは、経文の予言どおり迫害を呼び起こしそれに耐え抜いた日蓮大聖人一人であるという、烈々たる信念である。

「詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん」や「我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ」という大願に、われこそが末法の日本の真の救済者であるという、強烈な自負心を読み取ることができるであろう。本書が「人本尊開頭の書」といわれるゆえんである。

## 観心本尊抄

「観心本尊抄」は正式には「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」という。釈迦入滅後、いまだ著されることのなかった観心の本尊を、滅後第五番目の五百年（後五百歳）のいまになってはじめて明らかにする、という意味をもつ。末法の世において、万人が成仏しうる根拠を解き明かした本抄は、日蓮大聖人が確立した独自の信仰とその理念をもっとも体系的に示した著作である。そのため、古来より「法本尊開頭の書」として重視されてきた。

#### 平 頼綱との会見

平頼綱は佐渡流罪から帰った日蓮大聖人と会見し、次なる蒙古襲来の時期を問い、また寺院の建立を申し出るとともに蒙古調伏の祈祷を要請した。これに対して大聖人は、「今年の蒙古は一定よすべし」と、蒙古来襲は今年であると答えたが、祈祷の要請に応じることは謗法に同ずるものであるとして退けた。

#### 身 延

甲斐国波木井郷の身延山周辺の地名。山梨県南巨摩郡身延町。佐渡流罪を赦免となり、鎌倉で三度の諫暁を終えた日蓮大聖人は、文永11年（1274年）5月から弘安5年（1282年）9月までの足かけ9年間をこの地に過ごしている。

#### 法華取要抄

内容は、まず諸経を教法、教主の両面から勝劣を明かして法華経が最勝の経であることを示し、次いで法華経、なかんずく如来寿量品は釈尊滅後末法の日蓮大聖人のために説かれたものであることを明かす。

#### 文永の役

軍船九百漕に分乗した元軍・高麗軍は、対馬、壱岐を経て、10月20日未明、博多湾に上陸を開始した。日本側は苦戦したが、元側は夜間に引き揚げ、翌朝には船団は完全に姿を消していた。暴風雨があったという説もあるが、確実な根拠はない。日蓮大聖人は文永の役について「一谷入道御書」でその惨状を詳しく述べているが、この記述は文永の役を知る貴重な文献資料として価値が高い。

#### 池上兄弟

兄の池上宗仲と弟の宗長のこと。兄の宗仲は、武蔵国池上郷（現在の東京都大田区池上）の

地頭。兄弟はともに日蓮大聖人の門下であったが、極楽寺良観に帰依していた父の康光に信心を反対された。それでも信心を貫き、兄の宗仲は二度勘当されている。大聖人は「兄弟抄」等を執筆して励まし、兄弟は妻たちとともに父を入信に導いた。大聖人は弘安5年（1282年）10月13日、宗仲の館で入滅した。

#### 撰時抄

「夫れ仏法を学せん法は必ず先ず時をならうべし」と冒頭に示されているように、「撰時抄」とは、「時を撰ぶ抄」の意である。爾前経は機に応じて種々の説法をするゆえに機が主体であるが、法華経は時が来れば、相手の機根にかかわらず強いて説くので、時が主となる。

#### 報恩抄

内容は、最初に通じて四恩を報じ、別して故師道善房の恩を報ずべきことを明かす。そして、大恩を報ずるためには必ず仏法を習い極めて智者となることが肝要とされ、そのためには出家して一代聖教を学ばなくてはならないとしている。

#### 四信五品抄

末法の法華経の行者は、その位が四信五品（信心の四段階と五種の修行）のうち一念信解・初随喜の名字即の位であると明かすとともに、その修行は南妙法蓮華経の信受・唱題であり、それが成仏の直道であることなどが述べられている。

#### 下山御消息

律・念仏・真言・禅等の誤りを指摘、さらに天台宗が密教化するに及んで一国謗法となり、国が乱れたことを述べるとともに、僧俗の謗法罪を明らかにし、念仏無間地獄の義を強調し、正法への帰依を促している。

#### 本尊問答抄

末代悪世の凡夫が本尊とすべきものは法華経の題目であることを経釈を引いて明かし、真言宗の本尊を破折している。さらに承久の乱等の例を挙げて真言亡国の現証を述べ、蒙古の襲来を真言によって調伏する非を警告。妙法五字の本尊の未曾有なることを述べ、法華経の題目こそ末法弘通の本尊であることを確認している。

#### 熱原の法難

弘安2年9月21日、熱原の農民信徒が米略奪のぬれぎぬを着せられて逮捕され、鎌倉に送還される事件が起こった。農民を処断したのは、滝泉寺院主代・行智と通じる侍所の所司・平左衛門尉頼綱で、苛酷な拷問で信徒を責め、ついに神四郎ら三兄弟が殉教する。これを熱原の法難という。

#### 一閻浮提総与の大御本尊

日蓮大聖人は、弘安2年9月に捕らえられた熱原の農民信徒が激しい弾圧にも屈せず信仰を貫く姿を通して、庶民層へも大聖人の仏法が広がりを見せ、広宣流布の基盤が確立しつつあることを強く感じた。弘安2年10月12日に末法万年にわたる広宣流布の遺命の意義を込めた全世界、全民衆のための大御本尊を図顕した。

#### 弘安の役

弘安4年5月、日蓮大聖人の予言どおり蒙古の大軍が日本に襲来したが、暴風雨のため撤退した。大聖人は門下に宛てて、日本に生まれた者としてこの国難に遭わねばならないが、日蓮門下は後生には必ず仏国に生まれるとして、喜びで感涙を抑えるのことができないと書いている。また、蒙古軍を撤退させた暴風雨については、それはいつもながらの秋風によるわずかの水にすぎないとして、一時の安堵に浮かれる人々を諫めている。

## 日蓮大聖人苦難の生涯

1222年(貞応元年)	大聖人1歳(数え年)
2/16	安房国長狭群東条郷(現在の千葉県鴨川市)に生まれる。
1233年(天福元年)	大聖人12歳
	安房国東条郷の清澄寺に入山する。
	この頃、虚空蔵菩薩に「日本第一の智者となし給へ」との誓願をする。
1237年(嘉禎3年)	大聖人16歳
	道善房を師として出家得度し、是聖房と名乗る。
1238年(暦仁元年)	大聖人17歳
	この頃、鎌倉等に遊学する。
1242年(仁治3年)	大聖人21歳
	この頃、比叡山等に遊学する。

- 1253 年（建長 3 年） 大聖人 32 歳  
この頃、日蓮と名乗る。  
4/28 安房国清澄寺で立教開宗する。  
東条景信（地頭）によって清澄寺を追われ、浄顕房・義城房（兄弟子）にかくまわれる。  
この頃、鎌倉に出て、松葉ヶ谷に草庵を結ぶ
- 1258 年（正嘉 2 年） 大聖人 37 歳  
この頃、駿河国岩本実相寺で一切経を閲覧する。
- 1260 年（文応元年） 大聖人 39 歳  
5/28 鎌倉名越で「唱法華題目抄」を著す。  
7/16 「立正安国論」を著し、宿屋禅門を介して前執権・北条時頼に上奏する。  
7 月又は 8 月 松葉ヶ谷の法難
- 1261 年（弘長元年） 大聖人 40 歳  
5/12 伊豆流罪に処せられる。
- 1263 年（弘長 3 年） 大聖人 42 歳  
2/22 伊豆流罪を赦免される。
- 1264 年（文永元年） 大聖人 43 歳  
11/11 安房国東条郷で小松原法難に遭う。
- 1271 年（文永 8 年） 大聖人 50 歳  
9/10 幕府に召し出されるが、かえって平頼綱を諫める。  
9/12 平頼綱に書を送り再度、諫める。松葉ヶ谷で召し取られる。  
竜の口の法難。  
9/13 竜の口の刑場での斬首を免れ、相模国愛甲郡依智の本間六郎左衛門尉重連の邸宅に送られる。  
10/10 佐渡流罪となり、依智を発って佐渡へ向かう。  
11/1 佐渡・塚原三昧堂に到着する。
- 1272 年（文永 9 年） 大聖人 51 歳  
1/16 塚原問答  
2 月 「開目抄」が完成し、四条金吾に送り門下一同に与える。  
4/10 石田の郷一谷に居を移される。
- 1273 年（文永 10 年） 大聖人 52 歳  
4/25 「観心本尊抄」を著す。
- 1274 年（文永 11 年） 大聖人 53 歳  
2/14 幕府、佐渡流罪の赦免状を発する。



- 3/8 赦免状が佐渡に到着する。
- 3/14 前日、鎌倉に向けて一谷を出発するが、出航できず網羅の津にとどまる
- 3/26 柏崎、国府を通過して鎌倉に到着。
- 4/8 平 頼綱と会見し、蒙古襲来の時期について「今年は一定なり」と進言する。
- 5/12 鎌倉を出発する。
- 5/17 身延に到着する。
- 5/24 「法華取要抄」を著し、富木常忍に送る。
- 10月 蒙古襲来（文永の役）
- 1275年（建治元年） 大聖人 54歳
- 4/16 父によって信心を反対された池上兄弟に書（兄弟抄）を送る。  
この年、「撰時抄」を著す。
- 1276年（建治2年） 大聖人 55歳
- 7/21 師・道善房の死去に際し、「報恩抄」を著して清澄寺の浄願坊・義浄坊に送る。
- 1277年（建治3年） 大聖人 56歳
- 4/10 「四信五品抄」を著す。
- 6月 因幡房日永の帰依を咎めた下山兵庫光基に宛てて「下山御消息」を著し、本人に代わって弁明する。
- 1278年（弘安元年） 大聖人 57歳
- 9月 「本尊問答抄」を著す。
- 1279年（弘安2年） 大聖人 58歳
- 9/21 熱原の法難
- 10/12 一閻浮提総与の大御本尊を御図顕する。
- 1281年（弘安4年） 大聖人 60歳
- 5/21 元・高麗軍、対馬に侵攻（弘安の役、始まる）
- 1282年（弘安5年） 大聖人 61歳
- 9/8 身延を下山
- 9/18 武蔵国池上に入る。
- 9/25 池上で「立正安国論」を講ず。
- 10/8 本弟子6人（日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持）を定める。
- 10/13 午前8時頃、池上宗仲邸にて入滅する。
- 10/14 子の刻、葬送。

（参考文献）

「日蓮大聖人その生涯と教え」日蓮宗新聞社

- 「日蓮文集」 岩波文庫
- 「日蓮を読み解く」 ダイアモンド社
- 「日蓮入門」 ちくま学芸文庫
- 「日蓮大聖人年譜」 第三文明社
- 「日蓮大聖人の生涯を歩く」 第三文明社
- 「国僧日蓮」 学研M文庫